

JISS *Bulletin*

一般社団法人スウェーデン社会研究所 所報 第 375 号



Lena Granefelt/imagebank.sweden.se

【スウェーデンの点描】 聖ルチア祭

12月の行事といえば、25日のクリスマスがまず頭に浮かびますが、スウェーデンを含めスカンジナビア諸国では、13日に行われる聖ルチア祭も大切な行事です。

これはキリスト教の聖人である聖ルチアの聖名祝日を祝うもので、スウェーデンでは頭にろうそくをつけた女性がサンタルチアを歌いながら行進するというスタイルが定着しています。13日の朝にノーベル賞受

賞者が泊まるホテルの部屋に押しかけるのも恒例の行事となっています。

ルチアは、学校や近所の子どもたちの中で行うだけでなく、毎年「今年のルチア」を決定するための地方大会そして全国大会が実施されています。ルチアの伝統的なイメージはブロンドの白人ですが、人種の多様化が進む中、2000年に非白人の代表が初めて選ばれたことが話題となりました。

【2016年10月研究講座】佐藤文平氏（ボディープラスインターナショナル HALEO テニスディビジョン・日本体育大学大学院）、佐藤雅幸氏（専修大学スポーツ研究所）、佐藤周平氏（仙台大学）

「スウェーデンテニスに学ぶーこれからの日本のテニスー」

<発表者紹介>

登壇されたのは、専修大学スポーツ研究所 佐藤雅幸教授と日本体育大学大学院博士後期課程スポーツバイオメカニクスを研究している HALEO テニスディビジョン 統括ディレクターを務める佐藤文平氏です。共同研究者の佐藤周平氏は、現在仙台大学の講師としてスポーツ心理学およびコーチング学を研究しており、硬式庭球部の監督を務めていらっしゃいます。



<スウェーデン留学の目的>

1994年に佐藤雅幸氏（以下、佐藤教授）は本務校である専修大学より、長期在外研究員として海外留学の許可を与えられました。留学先は、スポーツ科学の先進国であるスウェーデン（ストックホルム）のA・トールステンソン教授の研究拠点、カロリンスカ研究所（バイオメカニクス&モーターコントロールグループ）・ストックホルム体育大学でした。

留学の主な目的は、火事場のメカニズム（筋力の生理的限界と心理的限界に関する研究）や運動における筋収縮のメカニズムに関する共同研究でした。また、テニスの専門家でもある佐藤教授は、1956年生まれで、スウェーデンが生んだテニス界のスーパースターB・ボルグやアルペンスキーの王者、E・ステンマルクと同年代だということで、スウェーデンのトップアスリートが育ってきた風土・文化にも興味を持って、

調査を実施されました。

留学は、御家族（本人、奥様、息子さん3名：小学校5年、3年、幼稚園年少）を引き連れ、一般のアパートで生活したことで、スウェーデンにおける小学校教育、幼稚園教育（ダーギス）、難民・移民の語学教育（エスフィースコーランなど）そして地元の生活なども体験することができました。



ストックホルム体育大学 (GIH)・カロリンスカ研究所

＜錦織圭選手と修造チャレンジ＞

現在、日本人テニスプレイヤーで最も活躍をしている選手といえば、錦織圭選手です。彼は世界ランキング自己最高位4位という偉業を成し遂げた日本人史上初のテニスプレイヤーであり、有明コロシアムで行われる試合の客席を満員にすることができる唯一の選手です。彼の育て親である松岡修造氏が18年間継続して”修造チャレンジジュニア合宿”を実施していることは有名です (<http://www.shuzo.co.jp/challenge>)。

修造チャレンジには、テクニカル、フィジカル、メンタルの専門家がサポートしていますが、佐藤教授は、メンタルサポート部門の責任者として活動しています。松岡修造氏が修造チャレンジを立ち上げて、世界に通じる選手を育成するのだと宣言した時には、誰もが失敗すると思っていました。特にテニスの専門家やジャーナリストは「無理だ!」と述べていたそうです。正直、一緒に取り組んでいた佐藤教授も半信半疑だったのですが、いつのまにか「修造氏の熱い熱い情熱」に引き込まれていき(笑)、疑う事も忘れて一緒に活動されました。その結果、錦織圭選手を筆頭に若い日本男子テニス選手達がグランドスラム大会で活躍し、「修造チャレンジ」の果たした役割の大きさが証明されました。プロテニスプレイヤーとして錦織圭選手のヒittingパートナーをつとめた佐藤文平氏の「錦織圭選手のようなロールモデルの存在は、これまでの『日本人男子は世界で通用しない』といった固定観念や思い込みといった、いわゆる精神的な壁を破ったことが、強さを発揮する若手選手達の増加に繋がるだろう」という言葉には大きなインパクトがありま

した。日本男子テニス界はまさに今追い風が吹いているようです。



修造チャレンジジュニア合宿ミーティング

<日本とスウェーデンにおけるテニス指導と文化の違い>

佐藤文平氏によれば、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、東京都北区にあるナショナルテニスセンター（NTC）や国立スポーツ科学センター（JISS）が現在の日本テニスに対する追い風になっているようです。トップアスリートを経験や勤で指導してきた時代から、最新のスポーツ医学を応用して効率的なトレーニングができる環境が整ったことでパフォーマンスの向上に繋がっていた事は間違いないとのことです。加えて、このような追い風の中で、テニスを日本のスポーツ文化としてしっかり根付かせるためには、日本の子供たちが置かれているスポーツをする環境を整備すると述べ、スウェーデンと日本とは大きな違いがあると指摘され

ました。

佐藤周平氏は小学5年生、佐藤文平氏は小学3年生として、ストックホルムのローダーベリスコーランに学び、エンシェーデ地区で暮らし、地元のサッカーチーム（エンシェーデ）でも活動しました。また、ストックホルムミニマラソンに出場するなど、多くのスウェーデン人と交流した経験から、スウェーデンでは子供の頃からスポーツを身近に感じる機会が多かったとのこと。たとえば、たまたまサッカーの試合を見学していたジーパン姿の彼に、スウェーデン人コーチが「一緒にプレーするか？」と声をかけ、「ヤー！」と答えるとすぐに「コミヤン（カモン）」と言われ、そのまま試合に参加させてもらった話はとても衝撃的で、気軽にスポーツを楽しめるスウェーデンならではのお話でした。また種目を絞って徹底的に練習を行う日本のスタイルとは違い、神経系の発達する幼少期（ゴールデンエイジ）には、サッカーやテニス、冬はスキーやホッケーなど多様な種目を体験することができる環境が、世界トップアスリートを生み出す環境であるとのお話もありました。

スウェーデンにおけるテニス指導の特徴は、子供の発育発達に応じた指導に注目していることです。発育の未熟なジュニア選手に、大人と同じ重さのボール、ラケット、同じサイズのテニスコートを使つての練習は、子供たちの心身に過大な負荷をかけてしまいます。スウェーデンでは、幼少期のジュニア選手は、短くて軽いラケット、スポンジボール（スウェーデンのトレトン社製）、そして小さなサイズのテニスコートを用いて練習しています。また、今勝つことよりも、フェアにプレーする事の大切さ

や、スポーツの楽しさやゲームの面白を学び、コミュニケーションツールとしてのスポーツの価値を教えることを基本に指導しているようです。



スウェーデンでの生活



味の素ナショナルトレーニングセンター (NTC)
国立スポーツ科学センター (JISS)

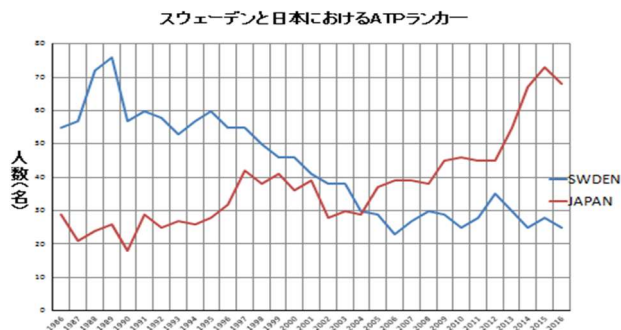
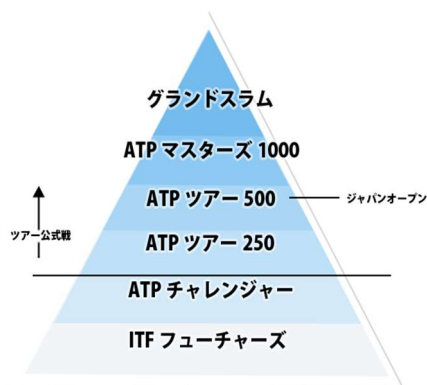
＜スウェーデンテニスの黄金期＞

男子プロテニス、グレードによって6段階のピラミッドにレベル分けされています。

その最も上に立つ世界最高峰の試合はグランドスラムと呼ばれており、憧れの舞台です。それなりに実力のある(ATPポイントを持っている)選手は公式戦からの参加が認められていますが、日本選手の多くはその予選であるピラミッド型の最下層”

ITF フューチャーズ” やその上の” ATP チャレンジャー” からの挑戦となります。

スウェーデンはデビスカップと呼ばれる男子テニス国別対抗戦において1975年から1998年までに合計7回もの優勝を経験しています。さらに、1986年ATPチャレンジャーのトップ10ランカーには3名の選手がランクインしています。この快挙は世界的に見ても非常に稀です。スウェーデンのテニス界は1993～1994年に黄金期を迎えたが、以降衰退を辿ることになります。一方、日本では2004年に錦織圭選手が登場したことを機に、日本のテニス界が活気づいてきました。そして2004年ついにATPランカーの数がテニス大国であったスウェーデンと逆転しました。(図:「スウェーデンと日本におけるATPランカー」参照)



男子プロツアーの仕組みと大会のレベル

＜日本テニスが強くなった理由＞

日本のテニスが強くなった要因はどこにあるのでしょうか。1つ目は、松岡修造氏と共に取り組んだ”修造チャレンジ”が若手選手の育成に実を結んだ結果です。そして2つ目は、錦織選手の存在です。錦織圭というロールモデルの存在は、非常に効果的で重要な役割を果たしました。3つ目は国家によるスポーツ強化費・活動予算の増大です。こういった取り組みが日本のテニス（スポーツ）を強化政策としてマッチして機能してきたことが要因であるようです。

＜スウェーデンテニスから学ぶ日本テニス発展の秘訣＞

今の日本のテニス界は、選手達の潜在能力を十分に引き出せる状況にあります。主役であるテニス選手やコーチが軸となって、強化システムを構築しそれが機能し始めています。この勢いを一過性のものとして終わらせるのではなく、テニスを日本の文化に根付かせていくための方法を考えなければなりません。

その鍵は、かつてテニス大国であったスウェーデンの教育やコーチングシステムを参考にすることです。その昔、スウェーデンでは、選手育成だけでなく指導者の育成にもフォーカスして指導システムを作り上げていた。このことは、我が国においてもテニスに関する情報の普及などを含めて参考にすべき事である。一方、その後の衰退の原因を考えると、B. ボルグというスーパースターの出現で、スウェーデンにテニスブームが起り続々と有望選手が輩出された。この事は両刃の剣であり、スウェーデンの選手やファンの心理的要求水準が上が

り、20位30位では話題にも上がらなくない、一番スポンサーが必要な下位ランキングの選手達にスポンサーがつかなくなったことも要因だと推察した。この状況は、今の日本の状況と非常にリンクするものがあり、我が国の今後の課題として取り組んでいく事が大切だと佐藤教授、佐藤文平氏はプレゼンテーションを締められました。

【おわりに】

私自身とスポーツとの関わりを振り返ってみると、幼少期からスポーツ種目を絞って専門的に練習してきたことに気づきました。様々なスポーツをするとよりも、一つの種目に集中して取り組むことが素晴らしいという、いわば日本的な固定観念に縛られていたようです。幼少期は多種多様の種目を経験して、自分の中に埋もれている潜在能力を発揮させる。様々な経験の中から本当に自分に合ったスポーツを見つけ出す。これは、スウェーデンとの比較によって得られた新たな視点でした。また、都会では強力選手が輩出されにくい環境にあるという理由として施設などの利用料の高さが挙げられ、子供達をスポーツから遠ざけているというご指摘がありました。その中で「簡単に、安価で、人を育てていく」とおっしゃっていたのが、とても印象的でした。

日本のテニス界の発展のために日々ご尽力されている方々から、テニス事情をわかりやすくご説明いただき、スポーツの専門家ではない参加者にとっても貴重な講演会でした。

[本稿は、明治大学国際日本学部3年 福島佳奈の講演記録を、講演者の皆様が加筆修正し、編集部が最終校正をしました。]

【2016年11月研究講座】毛利まこ氏、溝口園枝氏、石塚瑛資氏
「リーディングドラマの夕べ～『令嬢ジュリー』A・ストリンドベリィ作」

今回の研究講座では、毛利まこ氏、溝口園枝氏、石塚瑛資氏の3氏に、スウェーデンのみならず19世紀のヨーロッパを代表する劇作家であるA・ストリンドベリィの代表作『令嬢ジュリー』を、リーディングドラマという形式で演じていただきました。

毛利氏がスウェーデン大使館のオーディトリウムで『令嬢ジュリー』を演じられるのは、1995年の1人芝居、1999年および2009年の公演に続き、これで4度目になりますが、今回は、動きやセットを全て取り払い、言葉で語るのみで演ずるといふ、初の試みでした。

冒頭で毛利氏より、ストリンドベリィが『令嬢ジュリー』を生み出した時の背景事情についてのご説明をいただき、その後、毛利氏が伯爵令嬢のジュリーを、溝口氏が料理女のクリスティンを、石塚氏が下男のジャンを演じました。

それぞれの動作や情景を語りのみで表現し、鍵となる場面では2人による復唱を取り入れるなど、聴衆を引き込む迫真の語りによる効果がさらに増幅するような演出が随所に取り入れられていました。

社会階級による束縛から逃避して自由になりたいという思いと、依然としてそこから抜けきれない思いが交錯し、伝統的な階級社会にはほころびが見え始めた19世紀末という時代の雰囲気をも十分に味わうことができた、素晴らしいひとときでした。



[記録：鈴木賢志]

**【2016年12月】一般社団法人スウェーデン社会研究所
臨時総会および年次懇親会**

さる12月12日に、一般社団法人スウェーデン社会研究所会員による臨時総会および年次懇親会を実施しました。

2002年に現在の体制になってから、須永昌博前所長とともに本研究所を支えてくださった須永洋子さんが、本年をもってご退職されました。それによって、研究所の活動が一つの区切りを迎えました。

けれども、日本でスウェーデンに関心を持つ人々に対して、スウェーデンの情報を広く伝えていくという、本研究所の重要な役割を、ここで終えてしまうわけにはいきません。日本とスウェーデンの交流がますます深まり、日本でスウェーデンに関心を

持つ人々がますます増える中で、本研究所が担う社会的な役割は、ますます大きくなっていると感じています。

与えられた条件は、決して余裕のあるものではありませんが、須永ご夫妻がこれまで14年間に渡り築き上げてくださったものをしっかり守りつつ、さらなる発展へのバトンをしっかりつないでいきたいと考えています。

須永洋子さん、これまで長い間、お疲れさまでした。そして、どうもありがとうございました！

[文章：鈴木賢志]

